「常作天楽」

『極楽浄土には、つねにすぐれた音楽がかなでられている。』

これは、「阿弥陀経」に述べられている一節です。

私が、通夜、葬儀で雅楽を供楽する根拠としている言葉です。

通夜、葬儀では、いつもおきまりのお経や偈文が読まれてきました。

これで、遺族の悲しみは癒（グリーフケア）されるのだろうか？

亡くなられた方の人生、願いを憶念し、支えを頂いた縁に感謝できるのだろうか？　現代を生きる人が共感できる「おくり」が勤まるのだろうか？

このような思いで、試行錯誤して勤めるようになったのが「供楽」です。

供楽の曲目、通夜「盤渉調越天楽」。葬儀「黄鐘調越天楽」と「平調越天楽」、合計三曲を演奏します。

一人の時は、龍笛のみ。二人の時は、笙と龍笛の二管。三人の時は、篳篥が加わって三管で合奏します。

盤渉調の曲は、宮中では葬儀で演奏されます。「白柱」「竹林楽」「千秋楽」「宗明楽」。寂しげで透き通ったメロディーが奏でられます。

盤渉調の「越天楽」もどこかもの悲しくて、他の「越天楽」の原曲であるが故に、素朴さ、未熟さ、不安、まよいが感じられます。仏になることへの躊躇いが伝わってくるような気がします。

そして、黄鐘調「越天楽」には、音楽の成長が感じられます。不安と向き合いながら、新たな歩みを始める覚悟、仏に成ることへの意志が語られ、新たな歩みの過程が表現されているようにも感じられます。

最後は、平調「越天楽」。まさに完成されたメロディー。曲の主題、天を越えて仏として旅立つ。私は、この曲を吹きながら葬儀の場を退場します。宙を舞う心地、天を越える歓喜の飛翔の姿が伝わることを願います。

音楽には、心に響く不思議な力があると私は思います。

「悲しみ」、「不安」、「まよい」、「覚悟」、「安らぎ」、「よろこび」、さまざまな心のあり様を音楽は表現し、伝えてくれます。

『これが旅立ちということなんですね。心に染みました。』

見ず知らずの弔問の方からいただいた感想でした。言葉を介さず、音楽を通じての共感を得たことに歓びを感じました。そして、報われた気がしました。